

「幾世紀に跨ってマレーシア史を再考する」

—マレーシア歴史研究国際セミナー—

西尾寛治

独立記念日直前の8月下旬、3日間に渡って開かれたこのセミナー¹では、2つの Keynote Lecture と約50の報告がなされた。海外からの報告者は、ニュージーランド、インドネシア、シンガポール、台湾、日本など海外からの若干名であり、他方マレーシア国内からは多様な大学から参加者があった。

Keynote Lecture は、予定されていたインドネシア人研究者の参加がキャンセルされたため、ニュージーランドとマレーシアの名誉教授——ニコラス・ターリング(題目は Britain, the Tunku and West New Guinea)とクー・ケイ・キム(題目は The Diversity of Malaysian History)——の共演となった。一般の研究報告は、下記のように時代別に分類され、さらに6つのパネルに割り振られたが、現代史をテーマとする報告は、さらに政治・経済・社会というテーマ別に分けられていた(括弧内は報告数)。

Early History of the Malay World (9)

Malay States and Colonialism (15)

Malaysian History (26)

3日間という短い日程のためか、それぞれのパネルは、2ないし3つの分科会に分かれて同時開催するという形で進められた。そのため、参加者が聞ける報告数はかなり制約され、私自身が

聞くことのできた報告もごく一部にすぎないが、以下気づいた点を記してみたい。

第1は、分析が不十分な段階での報告が多かった点である。若手の講師クラスの報告者が多かったこともその一因であろうが、興味深いトピックを取り上げていながら、詳細な分析を加えていない未成熟な研究が目についた。第2は、事例分析だけという研究が少なくなかった点である。先行研究に対する反論や自己の研究がどのような点でニューコントリビューションとなるのかを明快に説明した研究が少なかったのは残念であった。

セミナーの運営については、まずペーパーがアブストラクトCD-Rでの配布となったことである。紙で配布されたのは報告要旨のみであったため、事前に研究の詳細を把握して分科会に臨むことはできなかった。さらに、報告時間20分、分科会全体の質疑応答時間30分という時間の制約があった。そのため、意見交換の活発化をかなり妨げていたように思われる。

とはいえ、いくつかの分科会では、会場からの確なコメントや質問が提出され、報告者との間に活発な論議が展開されていた。それは、マレーシア史の本場で開催された国際セミナーであることを参加者に実感させるものであった。私自身も、自己の報告を契機として若手のマレー研究者と交流を深めることができたので、その意味ではひじょうに有意義なセミナーであった。

¹ International Conference on Malaysian History “Revisiting Malaysian History over the Centuries” organised by Department of History, Faculty of Arts and Social Sciences, University of Malaya, 23-25 August 2004.